2023年3月26日　主日礼拝

説教題「人からの誉れ、神からの誉れ」　　ヨハネ福音書５章 41～47 節

主任牧師　加藤　誠

「わたしは人からの誉れは受けない。」（ヨハネ5章41節）、「互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしないあなたたちには、どうして信じることができようか。」（同44節）

先週は、主イエスが安息日にベトザダの池のほとりに横たわっていた病気の人を癒したことが発端となって、ユダヤ人たちが主イエスを厳しく問い詰める場面でした。「なぜ安息日に禁じられている癒しをするのか？」と詰め寄るユダヤ人たちに、主イエスは「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」と答えます。確かに神は天地創造のわざを六日間で成し遂げて七日目に休まれ、その日を安息日とし、神を礼拝する日として守るように私たちに命じられました。けれども、私たちを神の愛のもとに連れ戻す神の救いの働きは、天地創造から今まで休むことなく続けられています。「だから安息日にも、いや神を礼拝する安息日にこそ、わたしは父なる神と共に愛の働きをするのだ」と主イエスは言われたのです。しかし、安息日の掟を破るだけでなく、神と自分を等しいものとして語るイエスに、人々は猛反発をして「ますます殺そうとした」のでした。

その後 5 章 19 節以下で主イエスは「わたしの言葉を聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は永遠の命を得、また裁かれることなく、死から命へと移っている」（24 節）と、ご自分が神から特別な使命を受けていることを語り、「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。それなのに、あなたたちは命を得るためにわたしのところに来ようとしない」（40 節）と、ユダヤ人たちの不信仰を嘆かれる中で、今日の部分につながっていきます。「わたしは人からの誉れを受けない。」（41 節）、「互いに相手からの誉れは受けるのに、唯一の神からの誉れは求めようとしないあなたたちには、どうして信じることができようか。」（同44節）。ここで主イエスが厳しい言葉を向けているのは律法学者たちであったと想像されます。彼らは「神からの誉れ」のために身をささげて日々聖書（旧約）を学んでいた人たちでしたから、この主イエスの言葉は大いに心外だったことでしょう。「俺たちほど神の誉れのために働いている者はいない。ガリラヤくんだりから出てきた若造が何を言うか」と。けれども律法学者たちは、人々から「先生！」と呼ばれ、いつも「上席」に案内されるのが当たり前の中で、いつのまにか「人からの誉れ」を求める中に安住し「神からの誉れ」のために働く本分を見失っていたのでした。

けれども、この主イエスの言葉は「人からの誉れ」を求めがちな私たちにも鋭く向けられているのではないでしょうか。私たちは自分がしたことを誰かから褒めてもらえたり、喜んでもらえると素直にうれしいものです。そのような「人からの誉れ」がすべて「悪」というわけではないでしょう。お互いに感謝や励ましの言葉を

届けあうことは大切だと思います。

主イエスがここで厳しく語られているのは、一つには「人からの誉れ」を求めることの「危うさ」だと思います。例えばマタイ 6 章で主イエスは「施しをする時」に「右手のしていることを左手に知らせるな」と語り、「誰かに見てもらって、褒めてもらいたい」という、私たちの心に働くやましさを厳しく問うておられます。「施し」は、生活上の困難にある人のことを覚えて、何かお手伝いできたらと寄り添わせてもらう心が大切なのであって、自分が「善い人」としての評価を得るための手段として「施し」を利用することを厳しく戒められたのです。「人からの誉れ」を求める時、私たちの生き方は、神と隣人を愛し、共に歩むという「神が一番望まれている道」からどんどん逸れてしまい、歪んでしまうのです。

もう一つ、主イエスがここで語っておられるのは、「人からの誉れ」そのものがもっている「危うさ」だと思います。主イエスは神から病を癒す特別な賜物を与えられていましたが、その癒しの賜物を「自分が有名になるために用いる」ことはされませんでした。あくまでも「神からの誉れ」（神が望んでおられ、神が喜ばれること）を尋ね求める中で、一人ひとりと出会い、その人に必要な癒しをされていかれたのです。その主イエスに対して「人からの誉れ」が沸き起こっていきますが、主イエスはそのような「人からの誉れ」に対して慎重であり、距離を取っていかれた様子が福音書には記されています。例えばヨハネ 6 章で五千人を満腹させて奇跡を見た主イエスを「王」として担ぎあげようとした人びとを避けて、主イエスはひとり山に退かれました。「人からの誉れ」が、私たちをして「神からの誉れ」から引き離してしまう「危うさ」をもっていることを主イエスは見抜いておられたからです。つまり主イエスを「王」として担ぎあげようとした人々は、イエスに自分たちの願いをかなえてくれる「偶像の神」の役割を求めたのです。それは自分たちが「主イエスに従う」のではなく、自分たちの欲望や願いに「主イエスを従わせる」ことを意味しました。聖書が旧約聖書の最初から一貫して証ししているのは、人間が自分の欲望や願いに「神を従わせよう」とする時、その先にあるのは悲惨であり滅びであるということです。私たち人間が神の愛を離れて自分の欲望のままに生きる時、そこには死しかないのです。その死と滅びと悲惨から私たちを救い出し、神の愛に連れ戻すためにイエス・キリストは来てくださいました。

今の世界を見るとき、自らの野心のために政治を利用し、「人からの誉れ」を上手に操る権力者たちによって毎日生み出される悲しみや苦難があふれているのを見ます。「人からの誉れ」を求める危うさ、「人からの誉れ」そのものがもっている危うさを見つめる中で、主イエスが身をもって教えてくださった「神からの誉れ」を求めて生きる道を大切に受け取り。主イエスが招いておられる幸いと喜びと永遠の命にあずかっていきたいのです。